

流れ星とラストダンス

クラウン

流れ星とラストダンス

私は恋に恋をしていた。

平凡な毎日に飽き飽きしていた。

「好きな人いないならさ、付き合おうよ」

「うん」

気心の知れた幼馴染の和哉と付き合い始めた。

自分を好きになってくれる人なら、好きになれるんじゃないかって思ってた。例えば、家族みたいな。

それから三ヶ月。

家族みたいな好きと、私が恋焦がれる感情は別のものだと知った。

私は恋をすることなんて、やっぱりないんだって思った。

きっと、流れ星に当たるようなものだ。一生に一度あったら奇跡なくらいありえないこと。

それが、起こった。

夏休み明けに転校生が来た。名前は足立拓海。

まるでずっと前から知っていたみたいに重なる価値観。同じ目線。一緒に居るだけで心が躍る人。

それまで丁寧に積み上げてきたもの全てが間違ってたって思った。色のない積み木を、全部壊してしまいたい衝動に駆られた。

私にそんな勇氣はなかった。

ひとつ、和哉に隠し事ができた。

「好きなんだ」

足立君からの告白に、胸が高鳴った。

「付き合ってる人、いるから」

和哉の顔が過ぎて、私は素っ気なく答えた。

「じゃあ、賭けをしようよ」

私は頷いた。

文化祭の後夜祭で、キャンプファイヤーを囲んだフォークダンスがある。

『一番遠い場所から始めて、一緒に踊れたら付き合って』

これで吹っ切れると思った。文化祭フィナーレのダンスに参加する生徒が少ない分、曲が短くてこと、彼は知らない。

始まりは和哉と一緒に。手を繋いで、ステップを踏んで、クルリと廻って次の人。足立君は段々近づいてくる。弾む曲より鼓動が早い。

お願い終わらないで。お願い早く終わって。

彼に手を差し伸べたところで曲が終わった。

私がほっとしたような残念なようなため息をついた時、差し出したままだった手を引かれた。

足立君はまるで悪戯っ子みたいに笑った。

「まだ、ダンスは終わってないよ」

強い力で引っ張られて、たたらを踏むようにして走り出した。

振り返った和哉は列の中に紛れたまま、笑顔で小さく手を振っていた。
『ゴメンね』って言うこともできない自分に、どうしようもなく泣きたくなった。
心が留まりたいとどれだけ強く願っても、時間は流れる。気持ちは動く。私には止められなかった。

二人きりのフォークダンス。彼が口ずさむメロディも踊る。
心には悲しみと幸福が満ちて、夢みたいな虹色に染まる。
私の頬に流れ星が落ちた。
願いが叶ったことに気付いた。